

資料② 授業見学者の振り返りから (Ver1.0)

本日の目的

- 学び合いが進学校の生徒の中でどのような形で受け入れられているのか？
- 教員からの発問・生徒への働きかけはどのように行われているのか？
- 学び合いの授業の始めはどのように生徒に語りかけているのか？
- 生徒は自分たちの時間をどう大切にしているのか？

見学後の疑問点、ツッコミ等

- 1つのプリントにつきどれぐらいの期間を生徒にまかせるのか？
- 発展課題は、どれぐらいの割合の生徒が取り組んでいるのか？ (クラスによる・・・？)
- 発展課題は評価に反映させるのか？
- 生徒は授業に対してどのように感じている傾向にあるのか？
- 周囲の先生方 (管理職含む) は、授業スタイル、考え方に疑問や提案をしてくるか？"
- 科学を扱う理科の授業で、価値命題についてどれだけ扱ってよいのか？"
- 授業形式に関するツッコミ等を生徒から受けたりしないのか？
- 答えを言わないスタイルで正しい知識等を生徒が身に付けることはできるのか？
- プリントが続きのときは、いきなり内容に入るのか？
- 周囲の教員との関係はどうか？
- テストの結果はどうか？
- 保護者からクレームなどはないのか？
- このスタイルで1年続けて、生徒のモチベーションを維持する工夫とコツは何か？
- 生徒のノートの確認や評価などどうするのか？
- 授業初めと終わり (50分後) の課題達成の度合い (測定) はどのようにするのか？
- 語って、課題を出しても動きが悪かったとき、どんな活動、語りかけをするのか？
- この授業形式は、どの高校でも通用するものなのか？
- 授業内容のまとめ、フォロー等をその時間ではやらないのか？やらない理由は何か？
- 教師からの説明をどこでどのくらい入れるか？
- 教科書、資料集、問題集の取り扱いについて、生徒への問の投げかけと、それに対する受け答えはどうなっているのか？

気付き・参考になったこと

- 好きなもの同士？の時は、先生のプリント消化試合になってしまうのではないかと心配でしたが、トランプでシャッフルして緊張感と男女のグループ差を (内容の進みの度合いの

違い) 平均化したように感じた。これは自由 (安心、同性) と多様 (緊張、異性) を組み合わせることで授業にメリハリをつけている？

- オリエンテーションで大野先生が「ボクのいってることほとんど違うとか全部違うとか～」みたく、「選択」することの説明や授業スタイルの説明で、何回も「否定」「拒否」の姿勢があることを強調して認めているな一と感じた。
- 教員が知識を伝達するときは知へのショートカットが必要とされたとき。
- 突っ込むことが目的ではなく、何でも鵜呑みにせず納得解を得ることが大事という考え方。
- 「多様性」はグローバルな関わりだけではない。
- トランプを使ってグループをつくるどころ。
- 集団の壁を取り除くための「しかけ」"
- アクティブラーニング→与えるものは、目的と疑問と場と少しのアドバイスのみ。答えは自分でつかませる。
- 授業の”目的”は、「受験でうまくいくこと」ではなく、「豊かな人生を築くこと」。
- マインドとスキルを重視すること。これが将来生きていくために必要であることを明確に示すことは大切である。
- 授業中に立ち歩く動きが入っているのがとても良い。人間は身体的な生き物なので、思考と身体状態はつながっている。
- 生徒を否定せずに、常に前向きな方向へ導くこと。
- 振り返りシートの活用。"
- 生徒同士が教え合い、助け合い、1つのチームでしっかり学び合っていた。
- 板書で説明すると1時間では終わらないような内容でも、生徒に取り組ませた後に解説をすれば、より効果的に理解している。
- 思っていた以上に丸投げだった。しかし、その中でやるべき課題は明確に示されており、生徒全員が課題に取り組んでいた。1人で黙々とやっている生徒も、何らかの形で他の生徒と関わりながら課題をこなしていた。

資料③ 授業見学者の振り返りから (Ver2.0)

①本日の見学のテーマ

※「疑問形」でご記入ください。

※『学び合い』の授業はどんなものなのか?」などの抽象的な表現ではなく、具体的かつクリティカルな疑問を是非お願いいたします。

e x) 『学び合い』の授業では生徒をどのように動機付けているのか?

②テーマについての振り返り

※疑問形のテーマに対して、授業見学により何がわかり、何が疑問として残ったかなどをご記入ください。

③授業見学での気づき・新たな疑問・ツッコミ

※できれば「建設的批判」を最低1つはお願いいたします。

④その他のご意見・ご感想

東京大学教育学部3年生

①見学のテーマ

「学び合い」の授業において、学びの質を確保するためになされているのはどんなことか?

②テーマについての振り返り

「目標」「要点」の明示や、グループづくり、生徒の質問への対応といった形での「環境整備」を通して、単なる「自習」に留まらない「学び合い」を提供していることが分かった。

③授業見学での気づき・新たな疑問・ツッコミ

- 「先生がほとんど教えない」という授業形態は斬新で、非常に衝撃的だった。しかし、プリントの活用と徹底した環境づくりによって、しっかり「学び合い」の授業が成立していて素晴らしかった。また、必修範囲とは別に、希望者向けの発展問題を載せることで、より学習意欲の高い生徒にも対応しているところは、是非見習いたいと思った。
- 「学び合い」を重視する授業は、ある程度「生徒の自己責任」に依るところがあるが、「生徒の学力保証のために学校が積極的に介入する」という方針を掲げる学校（あるいは、そのような風土が根付いた地域）では、「生徒の学力が伸びなくても、それは生徒の自己責任」という方針は受け入れられない可能性があるのではないか。（特に、周辺に塾や予備校が存在しない地方進学校において）
- 大野先生の授業では、学習の進度が生徒によってばらばらであるが、一つの学級内にさまざまな学習意欲・習熟度の生徒が混在し、かつそれらの個人差が大きい場合においても、

この手法は活用できるのだろうか。(習熟度の個人差を「生徒のやる気の問題」ですべて片づけてしまうことになるのではないか)

④その他のご意見・ご感想

いわゆる「アクティブラーニング」「探究学習」の現場を見学したのは初めてでしたが、生徒の皆様が非常に生き生きしていたのが印象的でした。「学び合いが学習意欲を引き出す」ということを実感しました。

早稲田大学教育学部3年生

①見学のテーマ

生徒が自発的に問を持ち、他人に発信できるような環境はどのようにして生まれるのか

②テーマについての振り返り

「答えのない、または答えはあるが考えにくい問に対して考える習慣をつけること」と、「気軽に意見を話し合える関係性を構築しておくこと」の両方を用意すると問が生まれやすくなるように感じた。疑問点(自分が今後考えていきたいこと)としては、生徒に問を考える習慣をつけてもらうために、先生側に何ができるのかということ。

③授業見学での気付き・新たな疑問・ツッコミ

アクティブラーニング型の教科教育は生徒自身が考え、解決するということを主軸とするため、教科特有の学問的な面白さが伝わりにくいのではないかと感じた。例えば数学で考えると、(綺麗な)別解を伝えることが難しいように感じた。生徒自身では解決したことになっている問題で、かつ生徒には思いつきそうもないが数学の面白さに直結するような別解を先生が伝えることは可能なのか。(なんとなくであるが、自分で解決した問題についてさらに考えを深めようというような習慣と、先生の話聞くという習慣があまりないと感じたため、書かせて頂きました。)

資料④ 2015年度教育実習生の振り返り

1、Aさんの実習日誌より

母校国立高校での教育実習は、思っていた以上に内容の濃い3週間でした。正直に言うと、教育実習に来る前は不安でいっぱいでした。自分自身が毎日研究のこと、進路のことで迷ってばかりで、こんな状態で人前に立ってものを教えるなんてしていいのか、とても心配でした。

実際に実習が始まって、まず驚いたのは生物科の授業の形式でした。生物科の大野先生と板山先生の実践している「学び合い」の授業は、教師がただ教えるという形式をとらず、目標だけを明確に提示して生徒主体で学びを深めさせるというものでした。私が当初予想していたような、指導案をしっかり書いて板書計画も立てて、それを何回も修正して、というような作業はありませんでした。しかし、「学び合い」の授業をつくることはそれ以上に難しいものでした。自分のペースでなく生徒それぞれのペースに合わせた学習をさせながら、同じ目標に向かわせるには、教師の「やり方」ではなく「あり方」が大切なのだと教わりました。最初はどうもうまくいかないことも多くて、生徒の前に立つだけで色々考えてきたことが思い出せなくなったり、どうすれば良いのか考えるだけで毎日夜遅くまで寝られなかったりしました。色々悩む中で、指導教諭の大野先生がいつも言って下さったのは、「目的が何なのか考えて、その目的を軸に進めていけば良い」ということでした。生徒に一番理解してほしいことは何なのか、実習を通して私が生徒に一番伝えたいことは何なのか、考えてみて目的が明確になると、方向を見失うことなく授業ができるようになり、生徒の発言、行動に目を向ける気持ちの余裕が出てきました。そして、私が何も詳しいことを教えていなくても、生徒の自由な会話の中から本質をついた発言が出てきたり、生徒同士が互いに苦手な部分を教えあっている姿に驚きました。生徒はもとからそれぞれ力を持っていて、教師の仕事は「教える」ことではなく「引き出す」ことなのだ実感しました。そう考えると、教師が完璧な人間である必要はないのだなと思いました。もちろん、専門知識を深めて、人間力を磨いて、よりよい教師を目指すことは不可欠ですが、教師だからといって「完璧なフリ」をする必要はないのだと思います。教師だって悩んだり、迷ったりすることもあるし、むしろそれでいいのだと感じました。大切なのは、悩みや迷いを理由にくよくよしたり落ち込んだりせず、それが自分にとって必要なことだと受け入れて堂々としていることだと思います。その上で、「迷っても悩んでもいい。それはより良い自分になるために必要なことだ」と生徒に伝えることができれば、生徒にも何か力をあげることができるのではないのでしょうか。

「学び合い」の授業を進める中で、私が教えたことよりも私が生徒から教わったことの方が多かったように思います。授業以外でも、クラス活動や委員会、部活動に一生懸命な高校

生を見て、その活動と一緒に加わってみることで、結果をおそれずに何にでも全力で取り組んでいた高校生の頃の気持ちを思い出させてもらいました。大学生になってから私が忘れていた気持ちです。人からの評価や結果を気にしているだけで、まだ私は全力になりきれていなかったのだと気付きました。

教育実習の3週間を通して、教育について、生物という科目について、学校という場について、たくさん考えて、悩みました。また、自分を見つめ直すきっかけをもらいました。まだすべて結論は出ていませんが、今悩んでいるこの気持ちを忘れずに、常に考え続けることを意識して、これからの生活を送っていこうと思います。指導教諭の大野先生、生物科の板山先生からは大切なことをたくさん考えさせて頂きました。本当に充実した3週間でした。教職課程をとって良かったと思います。

2、Bさんからのメッセージより

こっちに帰ってきてからは、

- ・目的を明確にし行動すること
- ・周りの人に、自分の思っていること、感じていることを相手に伝える機会を増やすこと（教育について話すこともあります）
- ・人と話す時は相手をもっと話したくなるような問いをし『引き出す』こと
- ・背伸びをしないこと

をできるだけ心がけるようにしています。（実習に行かなければ、おそらく意識することはなかったと思います。）

そうすると、今まで気づきもしなかった考えや世の動き、面白い活動を知る機会が増え、最近は頭の中が軽くパニックです。けれど自分の中の目的・軸をもう少し明確にできたら、段々すっきりしてくると思います。今、楽しいです。

資料⑤ アクティブ・ラーニングを考える材料

2月14日 東大付属中等教育学校公開研究会での研究競技で参加者より出された疑問

- どのような生徒に対して有効か？
- どのくらいの進捗か？（一斉授業と比べて遅くならないか？）
- グループはどう決めるか？
- 教員間の温度はあるか？あるとしたらどのように折り合いをつけるか？
- 座席の配置等に工夫はあるか？
- 毎時間やるべきか？それとも向く授業と向かない授業があるのか？
- 答えは提示するのか？提示したら写すだけにならないか？提示しないと不安にならないか？
- 板書をどの程度行うのか？
- 生徒の質問にはどの程度答えるのか？
- どのくらい前から実践しているのか？
- 実践を始めたきっかけは何か？
- 内容がわかっている生徒は飽きないか？
- 内容がわからず孤立している生徒をどうケアするのか？
- 基本的な知識の定着のための方策は？教員が教えるのか、教科書を読んで理解させるのか？
- インターネット等の使用は認めるべきか？
- 学年による違いは見られるか？
- 協働学習をプレッシャーに感じないような工夫は何か？
- 生徒に任せることは、放っておくことと同じではないのか？
- 教員の役割は何なのか？自習と何が違うのか？
- 「まとめ」は行うのか？行わないとしたらそれはなぜか？
- 生徒が間違った理解をしてしまったときはどうするのか？
- できる生徒は教えるだけ、というような役割の固定化はないのか？
- 学力が高いからできるのではないか？
- 復習の際にポイントがわかりにくいのではないか？
- 問いの立て方が難しいのではないか？どのような工夫があるのか？

7月28日 首都大学東京リカレント生物学講座での質疑応答で参加者より出された疑問と松浦克美先生の応答

●クリエイティブな授業をやれる層とやれない層があるのではないかと？まずはベーシックな授業をすることも必要なのではないかと？

→論文でも、生徒主体の学習の方が結果がいいというデータがある。

●考えるためにはベーシックな内容が必要なのではないかと？

→本当にどこがコアなのか？それを見極める。

「問いを立てられる生徒」を育てたい。

●40人でアクティブ・ラーニングは可能なのか？少人数で生徒からの質問だけで構成しているが、大人数になるとできない気がする。

→生徒からの質問を多く引き出せるか、もしくはグループワークを増やすか、どちらかのパターン。

●「とにかくやらなければいけない」という流れで総合的な学習と同じような失敗が起こるのではないかと心配。「指導方法」まで学習指導要領に入ってくるのも心配。

→文科省は、かなり本気な雰囲気を感じる。うまくいこうがいくまいが、とにかくそれでやろうとしている。

大学教育、大学入試、高校教育を一体化して改革しようとしている。

松浦先生の立場は、それを何とか成功させようという立場。

今ここでチャンスを逃すとまずい。

●英語などでは生徒が動き回ったり活発にやっているが、結局何が身についたのかよくわからない。理科はしっかりと体系的に教えるべきなのではないか。

→すでにやっている人はそうは思っていないようだ。

●トップダウンでやるとうまくいかないのではないかと？

→だから、今のうちにトップダウンではないやり方で広めていく。

本当のトップはしっかりと考えている。

問題は、それを見ながら人を動かす人たち。

●単に考えさせればいいのかは疑問。それで「科学」というものが身につくのか。仮説実験授業はすごく良かった。アクティブ・ラーニングだけを取り上げて押し付けるのはどうなのか。

→今言っているアクティブ・ラーニングはすごく広い概念。

単に決められたルールを通るものではなく、しっかりとした仮説実験授業であれば、それはアクティブ・ラーニングと言えらるだろう。